

難波西鶴と

海の道

【30】

森田 雅也

前回は、江戸時代の
敦賀港の歴史的な繁栄
と衰退の説明でした。

西鶴の『日本永代蔵』

〔元禄元(1688)年刊〕

巻四の四「茶の十徳も一度に皆」は、

当時の敦賀を次のよう

に描写します。「越前

の国敦賀の湊は、毎日

の入舟、判金一牧なら

しの上米ありといへ

り。淀の川舟の運上にか

はならず。万事の間丸

繁昌の所なり」

敦賀港は、毎日、入

港してゐる舟が多く

て、1日の入港税(上

米)が平均して大判1

枚(10両)約100万

円)、年間約4億円近

い税収入になるのです

が、これは天下の淀川

の運上金と同額だと言

うのです。

この当時、淀川水系

が繁栄を誇る上方を支

えた水上流通の要で、

そこでの通行料が並一

通りでなかったことは

容易に想像がつきます

が、その収益と同程度

に舟の出入りがあった

のが、当時の敦賀港だ

にぎわいの中にも用心深さ

ったのです。ですから、
いろいろな間丸(問丸)
が繁盛しているのです。

次に眼を隣に転じれば、

「殊更、秋は立ち

つづく市の借屋、目前

の京の町」とします。

ことに氣比神社の秋の

祭礼のころになると、

市の仮小屋が立ち続

き、まるで目の前に京

の町を見るようなにぎ

やかさであったという

のです。

原文には、氣比神社

の市とありませんが、

敦賀と言えは氣比神社

です。秋の祭礼に市が

立っていたことも知ら

れています。芭蕉も、奥

の細道」で訪れた(元

禄2年8月14、15日)

名所ですので、その箇

所をあげます。

14日の夕暮、敦賀
の津に宿をもとむ。そ
の夜、月殊に晴たり。

「あすの夜もかくある

べきにや」といへば、

「越路の習ひ、なほ明

夜の陰晴はかりがた

し」と、あるじに酒す

すめられて、氣比の明

神に夜参す。仲哀天皇

の御廟なり」。

遊行上人ともかかわ

り深い、敦賀の名所氣

比神社は西鶴も知ると

ころだったのでしょ

う。続いて敦賀の気風

は、「男まじりの女尋

常に、その形気、北国

の都ぞかし」とされて

います。男の中に混じ

る女性の風俗も北国の

都と呼ぶにふさわしい

上品さだと言うので

す。そんな人出に、「芝

居もここを心がけ、市

習切も集まれば、今
時の人かしこく、印籠
ははじめからさげす

鼻紙袋も内懐に入れし

は、手のとびごと事にあ

らず。この中にも、

銭を一文、只はとられ

ず、盗人仲間もむつか

しの世や」とします。

ここにぎわいをあて

にして、芝居小屋が立

ち、巾着切り(スリ)

も集まるけれど、人々

は賢く、印籠、鼻紙袋

(貴重品入れ)にも用

心しているのです。銭一

文もとれない、盗人に

は住みにくい世になっ

たというのですが、こ

れは敦賀の人々の用心

深さ、賢さを讃えてい

るのでしょうね。

(関西学院大学文学

部文学言語学科教授)

淀川に並び繁栄した敦賀港